

学校給食の食べ残しと児童の体格との関連

○^{こじまゆい}小島唯, 安部景奈, 赤松利恵

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

【目的】 学校給食の食べ残しと児童の体格との関連を検討することを目的とした。

【方法】 2009年5～6月、東京都公立小学校に通う5・6年生の児童112名を対象に、給食の食べ残しに関する自記式質問紙調査と残食量調査を実施した。残食量調査は、対象者一人につき2回ずつ行い、延べ人数のデータを用いた。同時期に、質問紙を用いて、身長及び体重を調査した。残食量調査の結果から、食べ残しの有無により、残食率0%の児童を食べた群、残食率0.1%以上の児童を残した群とした。この2群の身長・体重・BMIに差があるかどうかを、GEE（一般化推定方程式）を用いて検討した。

【結果】 延べ人数で、220名分の残食データを得た。そのうち、5年生105名（47.7%）、6年生115名（52.3%）であった。性別は、男子106名（48.2%）、女子114名（51.8%）であった。5・6年生全体で、残した群が81名（36.8%）、食べた群が139名（63.2%）であった。なお、残食率は0.2%～84.3%の間に分布していた。

児童の身長の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で141.5（137.0,146.0）cm、食べた群で145.0（140.0,150.0）cmであり（ $p<0.082$ ）、体重の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で33.0（30.0,37.0）kg、食べた群で36.0（32.0,41.0）kgであった。また、BMIの中央値（25,75%タイル値）は、残した群で16.0（16.0,18.0） kg/m^2 、食べた群で17.0（16.0,19.0） kg/m^2 であり、食べた群の方が残した群に比べ、体重・BMIともに大きかった（各々 $p<0.001$ ）。

男女別に解析を行った結果（学年で調整）、男子の体重の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で32.0（26.3,34.0）kg、食べた群で35.0

（31.0,41.0）kgであった。男子のBMIの中央値（25,75%タイル値）は、残した群で16.0（15.0,17.0） kg/m^2 、食べた群で17.0（16.0,20.0） kg/m^2 であった。男子では体重・BMIに有意差がみられ（各々 $p<0.001$ ）、食べた群のほうが残した群よりも体格が大きかった。女子の体重の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で33.0（31.0,39.0）kg、食べた群で37.0（33.0,41.0）kgであった。また、女子のBMIの中央値（25,75%タイル値）は、残した群で16.0（16.0,18.0） kg/m^2 、食べた群で17.0（16.0,18.5） kg/m^2 であった。女子では、食べた群・残した群の体重・BMIに有意差はみられなかった（n.s.）。

学年別に解析を行った結果（性別で調整）、5年生の体重の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で31.0（28.0,38.0）kg、食べた群で32.0（30.0,35.0）kgであった（n.s.）。5年生のBMIの中央値（25,75%タイル値）は、残した群で16.0（15.3,18.0） kg/m^2 、食べた群で16.0（16.0,19.0） kg/m^2 であった（ $p=0.050$ ）。6年生の体重の中央値（25,75%タイル値）は、残した群で34.5（31.0,37.0）kg、食べた群で38.0（35.0,43.0）kgであり、BMIの中央値（25,75%タイル値）は、残した群で16.0（16.0,18.0） kg/m^2 、食べた群で18.0（16.0,19.0） kg/m^2 であった（各々 $p<0.001$ ）。

【結論】 残した群と食べた群の体重及びBMIには、男子および6年生において差があり、食べ残しをしない児童は、食べ残しをする児童に比べて体格が大きいことが示された。

(連絡先) 小島 唯

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

E-mail ; g1240534@edu.cc.ocha.ac.jp